手仕事 伝統の技と心

日本人の日常生活に息づいてきた工芸品。それらを創り出す磨き上げられた手仕事の技。そんな現代日本の職人の技を16mmフィルムで撮影、映像の手仕事によって丹念に編集し、映像作品に仕上げました。人に優しく仕事に厳しい職人さんの人間味溢れるインタビューを交えながら、失われつつある日本の技と心を次世代へ伝える、貴重な映像作品です。全30作品／各巻25分

① 遠野最後の桶職人
岩手県／近江栄蔵

文部科学省選定

北上山地の山懐にある遠野市。その厳しい自然の中で育まれた桶造りの技。職人の体全部がしなやかな道具となり、技となり、どんな小さな部分も端正に仕上げていく。
使う人に喜んで貰いたい、長く使って貰いたいそんな思いを込めてひとつの桶は創り上げられていく。
◆第20回米国産業映画祭芸術文化部門シルバースクリーン賞受賞

② 江戸風鈴
東京都／篠原儀治

文部科学省選定

型を使わず、ひとつひとつガラスを吹くことによって、形づくられる江戸風鈴。江戸中期に長崎のビードロ師によって伝えられた。風を音にかえて季節を愛でる粋な風情は江戸っ子の心をとらえ、たちまち広まったという。そんな江戸の粋を現代の東京下町で受け継ぐ風鈴職人である。

③ あぶ凧
神奈川県／三川由利五郎

あぶ凧は明治時代、寺の住職によって創り出された。鮮やかな彩色で、風袋を持ち、しっぽがないユニークな形の凧で、手の平にのる小さなものから、背丈ほどもある大型のものまで造られている。
河原で大空に舞うあぶ凧を見るのが何より嬉しいという子供達に人気の職人である。

④ 三線
沖縄県／又吉真栄

14世紀後半中国から伝来した三線（さんしん）は、琉球三味線または俗に蛇皮線と呼ばれる。
内地で一般的な三味線より棹が短く細い。棹に用いる黒檀は原木を切って３年、荒削りして１０年寝かせ、個々の重さに合わせてさらに削られる。こうして手間暇かけて雄大な音色が生まれる。

⑤ 浮世絵摺師
東京都／長尾直太郎

文部科学省選定

浮世絵は、絵師が原画を描き、彫り師が版木を彫る。そして摺師が摺る。１枚の浮世絵を仕上げるために、時には20版近くもの版を重ねて摺りながら髪の毛１本のズレもない、それが摺師の技。
絵師、彫り師に比べると地味な存在ではあるが、作品の出来は全て摺師の腕に左右される。
◆1993年教育映画祭優秀作品賞受賞
◆1993年日本紹介映画ビデオコンクール優秀作品賞受賞

⑥ 祝い風呂敷
島根県／長田安史

文部科学省選定

嫁入り道具のひとつとして待つ風習の祝い風呂敷。この風呂敷に、現在国内でも数少ない筒描きの藍染めが用いられている。筒描きの染めは、防染糊を筒型容器に入れ絞り出しながら生地に図案を描いていく手法で、ダイナミックな図案から細かな図案まで、職人の手で自在に表現されていく。

⑦出雲石灯籠
島根県／藤原良雄

仏前に献灯する神仏用具から庭園装飾品へと発展した石灯籠。出雲石灯籠は、粒子の細かい特産の砂岩・来待石を用い、石の持つ硬質感を柔らかさに変えるために、多彩で高度な表面加工技術を要する。
「孫子（まごこ）の代まで人目につくわけですから、恥ずかしいものは作れない」と石工は語る。

⑧ 加賀水引細工
石川県／津田梅

水引は結ばれることによって形づくられ、その結びの形で伝える意味や願いを表現する。結びという秩序の中で創造され、原則を踏襲し飛躍したところでの創作がある。慶事を彩る縁起物として伝えられ、伝統を継承しつつそこだけにとどまらない新たな世界が結ばれていく。

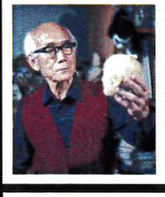
⑨ 和ろうそく
岐阜県／三嶋武雄

文部科学省選定

和紙、藺草、真綿で作られる燈芯に、ハゼの実から採られた木蝋を何度も何度もつけ重ねてできる和ろうそく。室町時代に端を発し、中国から伝来したと言われる技法は、200年余り変わらず受け継がれている。すべて植物成分であるためにすすが少なく、その焔は神秘的に揺らめく。
◆第41回日本紹介映画ビデオコンクール優秀作品賞受賞

⑩ 西ノ内紙
茨城県／菊池一男

かつて水戸藩専売品となり、水戸黄門によって「西ノ内和紙」と命名される。地元の良質な材料を使い、楮の生漉きによって作られる強靭さと優美さで「大日本史」編纂紙や公用紙として用いられた。
「何百年か後に残った紙ではじめて自分の仕事は認められる」と語る職人である。



⑪ 文楽のかしら
徳島県／大江巳之助

江戸時代より庶民の娯楽として親しまれてきた人形浄瑠璃は、大阪・文楽座での興業を機に文楽と呼ばれるようになった。この文楽人形の頭（かしら）には木目の細かい桧を用い、からくり仕掛けは鯨のひげで細工する。人形師は、かしらの年齢設定や、役柄等から性根を読みとり、その人形の魂を彫り込んでいく。

⑫ 総火造り鋏
千葉県／石塚正次郎

文部科学省選定

文明開化後、西洋文化の波に乗って、大量の羅紗布が輸入されるようになった。しかし、当時のU字型和ばさみでは厚地の羅紗は切るのが難しく、そこで日本刀の名工が鍛錬技術を取り入れ、日本特有のラシャ切り鋏（裁ち鋏）を創り出した。軟鉄に銅が張り、4千回もきん金槌で打ち伸ばされ、一丁の鋏が仕上げられる。

⑬ 押絵羽子板
埼玉県／京極寿喜松

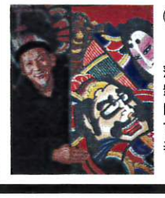
文部科学省選定

押絵羽子板が生まれ、歌舞伎役者が羽子板に描かれるようになったのは江戸末期。1つの羽子板は丁寧に布でくるまれた50～60もの部品から成る。美しく鮮やかであるだけでなく、羽子板の限られたスペースの上に舞台の迫力をいかに盛り込むかが、職人の技とセンスにかかっている。

⑭ 足袋
東京都／平井隆之助

文部科学省選定

一重の皮で作られていた足袋は、江戸時代に木綿が使われるようになり、足袋屋が登場した。
足首を紐で縛って固定する「ひも足袋」が、小鉤（こはぜ）で留める形になったのは明治以降。当初一文銭を並べて採寸したことから、一文銭の直径（2.4cm）を基準の一文とし、その言葉は現在も使われている。



⑮ 津軽凧
青森県／中野敬造

文部科学省選定

藩政時代、江戸の土産として津軽に持ち帰られた錦絵。その浮世絵の影響を受け継ぐ津軽凧の武者絵。1年の半分を重い雲と冷たい風雪に閉ざされる津軽で、厳しい自然風土を耐え抜く力強さが武将に象徴されている。一家を守る強さと優しさ、戦う孤高の哀愁を感じさせる武将の表情描写が中野氏の技。

⑯ 長板中形（藍染）
東京都／野口謹一郎

文部科学省選定

藍染が庶民の生活に普及し出したのは、木綿が日常生活品として浸透した江戸時代以後のことである。藍染めは別名『長板中形』とも呼ばれ、キッパリとした色柄で、浴衣や昼間着として親しまれてきた。「藍はいきている」と云われ、その温度、湿度で色の出具合が微妙に変わる。明治生まれの野口さんは染めの作業にかかる。それは静寂の中で藍と対局し、語らう一瞬でもある。

⑰ 弓矢師
神奈川県／安田正清

文部科学省選定

日本における弓道の確率は武士の台頭した鎌倉時代である。その後、鉄砲の伝来により、弓術は戦いの武器から心身鍛錬を目的とした武術にかわっていった安田家は、矢師として江戸時代には16もの大名に出入りした歴史をもつ。正清さんは、その十代目にあたる。矢づくりの勘どころは削り。丸み、目方、太さを考えながら削る様はまさに勘と技のみせどころ。

⑱ 組紐
埼玉県／須田とし

文部科学省選定

組紐の技術は奈良時代に中国から伝わり、公家の装束の平緒の唐組、鎧の緘（おどし）縅り締めの紐など見事な発展をとげた。須田さんは高台で組まれる両面亀甲の柄を得意とする。一目も狂わず組む集中力と、忍耐が不可欠である。

⑲ 丸亀団扇
香川県／西本多喜夫

文部科学省選定

丸亀うちわは今から360余年前、琴平参拝客に㊞印の土産うちわとして売られたのが始めといわれる１本のうちわが出来上がるまでには47手かかるといわれ、職人は骨師、絵付師、貼師の3部門に分かれている。西本さんはそのうちの骨師で、一本の竹に35本前後の割を入れ、「肩もみ」でささらにしていく。手づくり団扇、丸亀最後の職人の一人である。

⑳ 葛布
静岡県／川出茂市

文部科学省選定

葛の蔓から繊維をとり、1枚の布に織り上げた物を葛布という。その歴史は古く、万葉時代にはすでに私たちの先祖の身につけられていたという。織る人と人から人へと渡りながら、その土地に生きる人達の歴史が１枚の布に織り込められていく。川出さんは滅びゆく葛布をかたくなに守り続けている一人である。

㉑ お六櫛
長野県／川口助一

文部科学省選定

江戸時代、妻籠の旅籠の宿にお六という娘がいた。お六は頭痛持ちで、御岳山の大権現のお告げにしたがってミネバリの櫛で梳櫛をつくって髪を梳いていたらピタリと治ったという。ミネバリは別名を斧折（おのおれ）といわれるほど材は堅い。道具へのこだわりはおのずと深くなる。勘どころは刃びきで息をつめ、0.6mm間隔で85本の切れ目を一気に入れる。まっすぐ等間隔に引くこの技は、6代続いたまさに伝統の技である。

㉒ 京扇子
京都府／寺村喜太郎

文部科学省選定

団扇は骨の両面に紙をはって仕上げるのに対して、扇は紙面の間に骨を差し込んで仕上げる。扇子づくりは分業化されていて、寺村さんは「附け」を受け持つ。附けとは扇骨と扇紙を組み合わせて一本の扇に仕上げる最終行程である。扇子のしまりの善し悪しは、両側の親骨を加熱して内側に適度に曲げる「ため」の作業で決まる、といわれている。

㉓ 茶筌
奈良県／谷村守

文部科学省選定

高山茶筌は一子相伝のわざとして今日に伝えられている。室町中期、茶筌の粗、村田珠光と親交のあった高山宗砌（そうぜい）が珠光の為に茶筌をつくった事が起こりである。細かく裂かれた穂の内側を小刀を使って削っていく「味削り」に茶筌の命が吹き込められる。茶道の一期一会の精神は茶筌づくりから始まる。

㉔雨城楊枝
千葉県／森光慶

文部科学省選定

楊子は別名『黒文字』と呼ばれる。黒文字とは材料の木の名前である。楊枝は仏教伝来と共にインドから中国を経て日本に伝わった。当初は総楊子と呼ばれ、今でいう歯ブラシ代わりに使われた。歯の間に詰まった食べカスを取る楊子として使われはじめたのは江戸中期頃からで、江戸っ子は一寸程のものを粋とした。細工に必要な道具は小刀一寸。楊枝づくり一番肝心なことは、木を見極める目。良い環境の中で育った木は順応性に富み、良い物に仕上がる。それは人間と同じだと、森さんは話す。

㉕ 加賀毛針
石川県／野村喜久美

文部科学省選定

毛針は、昆虫に似せてつくられた鮎釣り専用の最小の疑似針である。野村さんは、13才で針巻師の家へ習子に。毛鉤は多種多様で約3000種あるといわれているが、実際につかわれているのは約100種類。毛鉤づくりは、人間の目と手の限界、超ミニの仕事である。最初の頃は、目の痛み、肩の凝り、足のだるさ、それらを乗り越えるまでが大変だったという。

㉖津軽こぎん
青森県／佐々木郁

文部科学省選定

こぎんは、弘前市付近の農村に生まれた200余年の伝統をもった刺しゅうである。かつて農民達は麻で働着をつくり、その貴重な衣類を長持ちさせる目的で刺しゅうを施したのが始まりであった。一時衰退したこぎんは昭和初期の民芸運動の中で、その美しさが見直され、佐々木や主婦たちの手によって現代に蘇っている。「遊び心や、新しいものに挑戦する気持ちが大事」と佐々木さんは語る。

㉗ あけび蔓細工
青森県／藤田良三

文部科学省選定

青森県のあけび蔓細工は幕末期、会津の浪士が岳温泉に湯治中にその技術を村人に伝授したことから始まったといわれている。藤田さんは農業の合間にあけびを編む。その編み方は底編みだけで10種類以上、全体の編み方になると実に30種以上。材料のあけびを適材適所に使い分け、出来上がりを想定して根気よく編むのがコツ。あけび細工は20～30年の耐久性があり、肌に感じる自然の暖かさ、やさしさがその魅力となっている。めてひとつの桶は創り上げられていく。

㉘ 煙管
新潟県／野島厚次

文部科学省選定

煙管は鉄砲と同じく安土桃山時代にポルトガルからもたらされ、江戸期には階級や職業に合わせた様々な種類が造られるようになった。明治44年生まれの野島さんは、煙管一筋60年の最後の煙管職人である。野島さんのつくる煙管の種類は、約50種。その中で一枚の銅板を叩き出してつくる延べ煙管が職人の腕のみせどころといわれている。ガン首に火皿がついてほぼ形が整うが、ガン首の曲げ具合、火皿の乗せ具合で煙管の生命が決まる。

㉙獅子（壺屋焼き）
沖縄県／高江州育界

文部科学省選定

屋根の瓦の上や門柱に鎮座する獅子のことを沖縄では「シーサー」という。シーサーは疫病や災害から身を守る魔除けとして古くから沖縄の人達に親しまれている。高江州さんは壺屋の窯元で、シーサーづくりを得意としている。形成されたシーサーは登り窯で二昼夜にわたって焼成される。火入りの時、未だ見ぬ我が子への愛しみの気持ちをこめて「うまらしみしょうれ」と祈る。我が子と対面する窯出しの時が何ともいえない、と高江州さんは語る。

㉚ 読谷山花織
沖縄県／与那嶺貞

文部科学省選定

花織は約500年前、南方貿易によって読谷にもたらされた。可憐でロマンチックな紋様は、かつては琉球王朝の御用布に指定されていたが、明治中期頃から衰退の一途を辿り、幻の花織になった。昭和39年に読谷村在住の与那嶺さんらの手によって復元され、読谷の女性達によって、その伝統は受け継がれている。与那嶺さんは、女性の生き方を花織に重ね合わせて語る。1999年人間国宝に認定された。

ドキュメンタリー	COLOR	STEREO	DVD	各巻25分

企画・製作
㈱東京映像社
東京都港区麻布十番1-8-13 〒106-0045
TEL 03-3586-7231／FAX 03-3586-7267
info@tokyo-eizo.co.jp